

# 倫社・政経の学習指導の実践的研究

## (第五報告)

中尾正三

### I. まえがき

① 昭和36年の指導要領改正で「倫社・政経」が設けられて以来、附属で実験的研究が可能な点を生し、いろいろな角度から倫社の学習指導についての実践と研究を重ね、昨年までに第四報告まで出した。正式には倫社は39年度から、政経は本年度(40年)から始まったが、新しい教科課程の学習終了者が、41年この3月には卒業することになっている。本報告は本年度から「倫社・政経の実践的研究」として、今後も継続していきたいと思う。

② 本校は附属ではあっても所謂優秀者のみを集めたものでなく、完全拙せんによる附属中入学者の大半が、中学終了後進学してくるので、生徒の質の構成は公立高校と比較して、有名校の下位者程度から普通の公立の最下位者よりも下のものまでを含み、「現場の悩み」を同じくしている。その点で、本研究の結果は「附属であるという」条件をぬきにして、一般的意味をもちうるものとする。

(なお、従来附中以外の外部からの進学者は20名程度であったが、本40年度から1学級増設され外部からの進学者は70名程度となったので、高校の雰囲気も相当変わったことをつけ加えておきたい。この点については本紀要の生徒指導に関する報告論稿を参照。)

③ 倫社は5回目、政経は1回目にとりくみであるが、問題はますます錯綜し壁に直面して、倫社・政経の問題をもっと広い視野から教育全体の中に位置づけて考察する必要があることを感じた。それで本年は実践的研究のみでなく、⑦後期中等教育改革の動向の中で社会科教育と道徳教育・政治教育の問題を考え、更に④戦前の修身・公民科から戦後の倫社・政経までの教育の歴史をふりかえって、そこから現在の問題を考えようとしてみた。その研究報告は、本紀要に「後期中等教育の教育課程改革の動向と問題点」(P 4)、「後期中等教育における道徳教科の史的研究」(P 134)として、それぞれ報告してあるのであわせて参照いただければと思う。

### II. 本論

#### II-1 昨年度までの到達点と残された課題

本年度の実践報告に入る前に、第一報告から第五報告までの研究をまとめて、第四報告の終りにかけておいた仮説的結論と基本的視点を、要約してここにべておきたい。(それが今年度の実践の前提となるものであり、また始めてこの継続報告を手にかされる方にはよいと思うので。)

#### A. 倫社の目的・性格

倫社の目的・性格についての見解の対立が、教育の混乱をまねき、あせりや幻滅や、おしつけや暗記のみやの傾向をうみ、また、評価すべきか否か、するとしたらどのようにするか等の問題がある。私の4年間の実践からの結論は「倫社は、そのまま道徳教育のすべてではない。学校教育の中での一つの教科として、倫社の目的は、客観的な人間の内面把握と社会分析(sein)、そしてそれらを主体的に支配し変革創造してゆける知性と態度(sollen)を、知的認識を通して形成してゆくことである」という考えであった。倫社ですべてをやるのではなく、限界を確認し、しかし「ここまでは可能である」というものを見出し、そこに努力を集中していくことが必要なのではないか。4年間の生徒の反応や成績から、倫社で『①相互の交流と人間についての知識を深める中で、共感と解放感(安心感)をもつ。②自分を再認識し、自分の問題を意識化する。③自一他を含む人間(社会的人間)への理解と認識をもつ。④思想への関心と理解をもつ。⑤抽象的・論理的思考を身につける。⑥社会的・歴史的思考を身につける』ことは可能であるし、またやらなくてはならないと信じている。そして、その中でもとくに「知的理解と抽象的・論理的思考」の育成に重点をおき、その観点からきびしい評価もなすべきであると思う。

#### I. 方法——4つの原則——

① 教師⇄生徒・生徒⇄生徒のコミュニケーションを大事にすること、生徒の現実から出発すること。

「生徒の要求や関心と結びつくもののみがエネルギーを生みだし、やがては主体的思考に成長し、社会変革の原動力にまでつながってゆく。生徒は克服されるべきか、かすの欠陥や未熟さをもちながら、彼らなりの問題意識や自己成長の願いをもっているのである。それを大事にすること。しかし、それは生徒の興味に迎合し、実感をそのまま甘やかすという意味では毛頭ない。」生徒は、出発点とされるべき主体者であると同時に克服され引き上げられるべきものとしてとらえらねばならない。克服されるべきものとして「①抽象的・論理的思考の未熟・統一的体系的理解の困難 ②基礎的知識の不足 ③主体性喪失・状況埋没的思考」があるであろう。

② 「生徒のまだ漠然とした未分化的・感性的なものを抽象的理性的認識にまで高めてゆく為には、きびしさも必要である。混乱させることも必要である。それまでの無自覚が崩され、日常的常識が否定されるところから論理の学習は始められるといってもよい。その混乱の中から自分を整理し再統一してゆく努力の中でこそ、古来の思想史から何かを学びとってゆけるのではないか」

③ 「生徒の必要・関心・理解度を考慮し、身近かな具体的なものから出発し、生徒⇄生徒、生徒⇄教師の交流をはかりながら、知的系統にもとづく講義を主として、時に応じて討議や自学発表、更に課題を与えての読書の中の感想の発表などをまじえながらすすめてゆく—といったやり方がもっとも妥当なように思える。固定した方法はありません。面白く(興味・要求にこたえ)、わかりやすい(系統的論理的)学習がなされればよい。」

④ 「価値観の対立侵入をおそれてクレイゴトに終るのも、かといってあるひとつの立場を絶対化しておしつけるのも共にさけない。たとえ「全く当然な」ことであっても、そのアタリマエのところまでどうして到達しうるかをはっきりさせることが重要である。ネバナライ、ベキデアルという断定的表現に示す生徒の反撥を見おとしてはならない。教育というものは、何を考えるべきかを与えるのではなく、いかに考えるべきかを教えることである。」

## ウ. 内 容

倫社は心理学(文化人類学・精神分析学・青年心理学 eto を含む)・倫理学・倫理思想史・社会学・社会心理学などの広い分野の寄木細工である。その盛りだくさんの内容を消化することは教師自身にも困難である。悪くするとバラバラの知識を丸暗記—ということにもないかねない。要は「現代日本の社会で如何に生きるか—」という一貫した問題意識によって、それぞれを統一的に組織し、更に本質的なもの以外を切り捨

て、精選・整理して、深化してゆくことが必要だと思う。

内容—配列としては(心理的→倫理的→社会的)よりも(心理的→社会的→倫理的)の方がよいのではないか。

更に各分野にみると、

「人間性の理解」の分野は導入部分としてきわめて重要である。その配列は人間と文化(1)、人間形成の条件(2)、青年期の問題(3)の順を倒逆して、3→2→1とした方がよいのではないか。

「人生観・世界観」の分野では、

① 倫理想と事実としての倫理と区別し、従って古典ギリシアから始まる倫理想史を修正する必要がある。

② 東洋・日本の思想の扱いが量的にも、質的にも不十分である。現実の日本に焦点づけて、例えば仏教では古代インドの原始仏教や鎌倉仏教のピークだけでなく、それと現代の身のまわりの仏教とをつなぐ歴史的筋道をつける必要があること、またアジア・アフリカのナショナリズムを理解させるために古代東洋だけでなく、イスラム・ヒンズーの近代にもふれる必要がある。そのことは近代日本のナショナリズムの扱いについてもいえる。

③ 現代思想の位置づけは、第3分野の「現代社会の特質と文化」のあとにした方がよい。

④ 「倫理想のテーマ的学習(T)と思想史的学習(S)について——①は主体的思考を形成してゆくためには有効のようだが、生徒が両極分解をしてゆく(優秀なものはのびるが、悪いものは——)という傾向がある。生徒もテーマ学習をすすめていく中から系統的思想史の学習支持へと転向していくのが多い。しかし、これについてはもっと検討を必要とするので42年度までの継続課題とする。予想されうる方向は次のとおりである。

◎テーマ学習の場合

(T1) テーマ学習だけ。

(T2) かんたんな系統→テーマ学習。

(T3) テーマ学習→系統的整理。

(T1)よりは(T2)と(T3)が有効だが(検討済み)更に(T2)と(T3)の間の比較研究が必要である。また現行教科書中、テーマ的編集をしている唯一つの教科書は(T2)の方法をとっているが、その使用をすすめる際

(T2-1) その教科書を講義式でやる。

(T2-2) 生徒の話し合いをすすめる中で、その整理のために批判的に教科書を使用する。

◎系統史的学習の場合

(K1) 浅く広く—普通の構成。

(K2) 系統的学習の後で問題別整理を。

(K3) 少数のものにしぼって深くやる。

この場合(K2)は(T2)と似ているが(T2)は系統→テーマ、(K2)は、系統→テーマと力点のおき方がちがう。

以上の中、K1がもっとも広く行われているが、それと対比しながらT2・T3・K2・K3の比較研究をすすめてゆく。

## II-2 本年度の実践

以上のような昨年までの到達点と残された課題をふまえて本年度は

① 高1-3学級、倫社

㊦ 「人間性の理解」の三つの構成要素、「人間と文化」(1)、「人間形成の条件」(2)、「青年期の問題」(3)、の配列の仕方を、

A組 1→2→3

B組 2→1→3

C組 3→2→1

で比較検討する。

④ 全体の学習順序を心→倫→社という進み方ではなく心→社→倫という昨年一部に実施したやり方を全学級に実施し、とくに社会的分野の学習の重点をおく。

② 高2-2学級、倫社

倫理思想の系統史の学習を世界史とかみあわせて統一的に行なう。(東洋史の部分をうけもって、倫理思想史のうち東洋思想とかみあわせて行なう。)

③ 高3-2学級-政経

㊦ 初めての政経学習である。従来的一般社会・社会科社会の教科書とは全く対照的な近代経済学(マル経に対して)の立場の教科書を使う。(政府の経済白書や経済界の考え方をとらえるためにも必要であると思ったからである。)その学習をすすめて、生徒の理解度や反応を考察する。

④ この生徒達は高1から3年間、倫社政経を学習してきたわけである。(本校では、倫社を高1~高2と週1時間実施してきた。その現由及び実際については第3・第4報告参照)。特にこの学年は、倫社が正式に発足する1年前から、新教科書を実験的に使用させてもらって学習をすすめてきたのである。3年間の学習の成果がどのようになるかをとらえたい。

以上のような研究計画をたてて実施した。以下かんたんにその結果を報告する。

### II-2-1 倫社・心→社

㊦ 心理的分野の三つの要素

前にのべた1→2→3, 2→1→3, 3→2→1の

実施の前。私は3→2→1がもっとも良いだろうとの仮説をたてていたが、三方式をそれぞれ併行してすすめての結果、生徒の関心度・よろこび・興味・成績について、ほとんど差異を認めることはできなかった。この分野の学習はどこから入っても、問題はその内容ととり扱い方にあるという結論である。

④ 心→社

心理的分野の学習を一学期で終了し、二学期は社会的分野の学習に入ったのであるが、生徒の反応は「むづかしくなった」ということである。その理由を生徒の手記によって考察してみよう。

困難の原因

① 内容の変化

「1学期の内容は私達に身近であり、又常にぶつかる疑問等についてであったので興味があつたが2学期に入つて——」「青年におこるさまじまの心理、それは現在の我々の姿であると思うのです。このような青年とか人間の心とかいう問題は、我々に痛切に何かを感じさせ、とても魅力がある。」「1学期及び2学期ともならつたことは、たしかに身近かなものばかりであったが、1学期の青年の心理、人間の心などは非常に身近かなものであり、今すぐにも知りたかつたことばかりだつた。しかし2学期の社会集団ともなると我々高校生にはたしかに考えねばならないこととは思うが範囲が広がりすぎる。つまり、勉強・クラブに追われる者にとっては関係ないといつても良いくらいであつた。」「心理の方がもっと興味がある。というのは、現在私は社会という大きなものの前に、もっと小さな自分というものが分らない。一体自分はどうしたらよいのか。全然見当がつかない。自分はなぜこんなことを考えるのかということも分らない。」「自分達の身近な問題から急に幅の広い問題に移されたので、理解しにくくむづかしくなつた。」

② 方法上の問題

「1学期はグループで討論し合つたので、いろいろな意見がでておもしろかつた。2学期は先生と本の一方通行だつたのでおもしろくなかつた。」「1学期は何か身近な問題をとりあげて話し合つていたけど、2学期はかけ離れた問題のような気がした。その結果、何かむづかしくなつたような気がした。」

③ ことば、概念。

「新しいことばが沢山でてきた。」

とにかく、生徒にとっては抽象的思考が困難らしい。この問題は3年の政経でも出てくるので、あとでまとめて考察したい。ある生徒は「授業をやつていくうちに、自分のきちんとした考えを持つ事は大変重要だと感じた」とのべているが——。

II-2-2 思想史と世界史

社会的歴史的背景と流れの中で思想史をやっていくことはたしかにいいことだとは思ったが、何よりも世界史の教材内容の豊富さと多読さに生徒がふりまわされて、おちついて思想を追求するということができなかったというのが、正直な結果であった。倫社も（とくに思想史は）内容の過剰と構造的整理の未熟さが指摘されているが、世界史とくに東洋史の部分はひどすぎる。思いきった精選と、しかしきちっとした統一性が必要である。現在は断片的知識の無構造的な積みであるといっても過言ではない。

II-2-3 政経

㉞ 政経学習への関心と困難点

この学年は倫社もさほど失敗ではなく学習してきたのであるが、政経の方がもっと興味が深かったらしい。表1をみると52%が政経に興味を示しているが、女子は倫社の方が2倍になっている。政経の中では男女共経済の方に興味を示している。なお、政治と経済のどちらが役立つかという問いに対して表2のような結果が出ている。ここで、政治に否定面(0, -)がやや強く出ていることが気にかかる。私自身の指導も反省する必要があるが。経済の(-)が42%というのは理解の困難さを示すと思われる。表3をみると生徒は政経に対し倫社以上に関心をもっているのだが、分りやすさは逆なのであり、政治の方が経済よりも分りやすいのである。即ち、経済はもっともむづかしいのだが同時に関心はもっとも持っているのである。問題は、その興味をもてない困難点にある。

(表1) 興味 %

	計	男	女
倫社	48	20	28
政経	52	38	14
政治	34	18	16
経済	66	40	26

(表2) 役立つか

	+	0	-
政治	38	46	26
経済	43	33	42

(表3) 分りやすさ%

	計	男	女
倫社	54	28	26
政経	46	30	16
政治	78	46	32
経済	22	12	10

政経学習に対する抵抗・困難点の分析

① もっとも大きな要因は彼らの高2における倫社学習時にはあげられていなかった受験の影響である。

「入試に必要なしとわりきっているものだから自分からすんで自分のものにしようとする意欲がなく、しだいに分ら

なくなってきた。」「現在、ひまがあればやりたいが受験期をひかえているので好きになれない状態」「高3になってから政経をやってみても、受験科目それに主要5科目に力が入ってしまうのでもう少しやさしくしてほしい。政経なんかない方がよい。」(一②)でみるように学科自体の難しさがあるのにこれでは分りにくくなるのは無理もない。

② 内容の概念的抽象性による高度さ

「語句が新しくおめにかかるものばかりでとっつきにくい。」「現実的な問題もあって興味はもてるが、むづかしくてやる気が出ない。」「今はとても政経を勉強しようという気はない。本をめくってみても分らないことばかり、とても理解できそうにない。」「我々の生活に直結した問題なので興味はあるが、どうも理解しにくい。」

③ 内容の豊富さ・量的膨大さ—それとからんでのスピードの早さ。

「時間数が限られているから仕方がないかも知れないが、もっとゆっくりやってほしい。むづかしいのに早く進められるとやる気もなくなるし、あってもついていけない。どうしようもなくなる。」「むづかしくても、ゆっくりと考えながら授業がすすめられれば、よく分るのだが」「授業のやり方そのものは悪くはないが、多少速度がありすぎるし、それにとまってむづかしいので困る」「教科書の内容が多すぎるので、それだけで圧迫されてしまう。」「おぼえることが多すぎてテスト本位になってしまい、あまり身にならないと思う。」「私にとっては卒業後社会に出るので、政経とくに経済が必要なのでやらなければいけないと思うが、今の状態ではとても理解できそうにない。一年でこれだけ全部をつめこもうとするのは無理だと思う。学校でやるのが政経だけならいいが、ほとんど毎日数学・英語に追いまわられて政経まで手がまわらない。その上試験の時も科目数が多すぎるので、どう勉強したらよいか—」

④ 教科書の叙述・まとめ方・表・グラフ

「一つの項目についてのまとめが長すぎてむづかしい。グラフや表がむづかしすぎる。」「分りにくい言いまわしが多い。」「教科書を読んでもあまりよく分らないのに何を話し合ったらよいか—まして生徒の発表は無理だと思う。」

① 学習方法について

上にのべた困難さのため倫社でとった話し合いや発表による学習について生徒は次のように感じている。「話し合いなどの方法がおもしろいと思う。それぞれの人がちがった意見を出し、他人の意見を聞いていると自分の考え方の甘さなどがわかる。」「倫社のグループによる発表形式の授業は僕なりに講義中心より分りやすかった。政経は内容的に僕らには困難かも知れないが。」「先生の講義を理解するのでさえ容易ではないのに、その上我々が調べそれをうまくない方法で発表したのではますますわからなくなるでしょう。ただし学習内容についてときどき話し合いをもうけるのはよい事だと思う。そこで自分のわからない所や誤解などが解決されることもあるから。」「講義式でもなかなか理解することができな

いのに発表式はむづかしい。話し合いの方はやっぱりおおいにやった方がいいが、その前にきちんとした知識がなければなかなか意見をのべるのができない事がある。」「私は先生の講義+話し合いが理想的だと思う。週2時間ではそれだけの時間がないのが残念だ。ただ先生の講義だけだとつまらなくて自分で考えることがなくなってしまおう。」

## II-2-4 倫社一政経を終えて

彼らの3年間の学習を終えての感想の中にみられる問題点を分類してかかげておこう。

### ① 方法—内容

○先生がダツセンした所、すなわち身近かな問題、現実にある問題だけはよく分るが教科書の内容にはただフンフンとうなずくだけである。

○先生の授業は、教科書の内容を“単なる文字”として扱わないで現実にあてはめて考えさせているので現実感がわく。

○倫社の発表は自分たちでしらべて発表し、試験の時まるおぼえて終わったが発表形式をとる前は先生がいろいろ考える問題をだして下あったから考えれた。政経は、現在にそくして話される問題は面白くて興味がわく。

### ② 倫社と政経

○どちらも分りにくい課目だが政経の方は中3の時に少し学習したからよいようなもの、倫社ときたらさっぱり。昔の思想家がこういうことをいった、又別の思想家がこういうふうにいって、こんなことを勉強して何になるんだろうかとよく思った。あげくの果は勉強することまでいやになった。我々は現実を見つめている。現実のことでもいやなのになましてや過去のことを勉強する一当然いやだ。

○政経の方はむづかしいことはむづかしいが直接私達に関係してくるので、やっついていくととてもおもしろくなってくる。

○倫社の方が政経よりも簡単だと思う。何故かと言えば、倫社は「——という考え方があります。」「○○という人はこういう考えを持っています」という風に単純ではあるが政経、特に経済は大へん複雑でわかりにくいと思う。世の中の複雑なことがよくわかる。

○倫理は興味があってももしろかったが、政経はいろいろな言葉が出てくるしわかりにくいからきらいな面が多分にある。しかし現実的な問題と関係があるのでやはり興味がわきましたわかってくればこれ以上面白いものはないと思う。

○政経になると興味はほとんどゼロ、倫社の方が人間性にふれている点が多いから少し興味をひかれる。

### ③ 立場—価値観

○はっきりいって、倫社・政経の学習で心に強く残っているのはやはり倫社と思うが、この差というものはどこからくるかわからないが、今思いつくのはやはり政治経済がたった一つの立場で物を見たような書き方がしてあること。教科書全体がただ文章化してただだらと書いたというような感を受けるからかも知れない。倫社ももちろんそうなのであろう

が、この感じがあまり強く出ていない。出版社の違いせいかも知れない。

○立場というのは大きな問題でありましょうが、あまりに中立を無理によそおうのはかえってわからなくなる原因だと思う。

○教科書は政府及び文部省の側の主張が強くて、その反対側の少なからぬウェイトをしめる意見が無視されていないともかぎらないので、その方の立場に立った話もしていただくことも必要だと思う。その点、先生の授業はよかった。

○他の学科とくらべて非常にやりにくい学科だと思う。数学なら答がピタッと出るし、英語・国語及び歴史・理科でもある程度の解答がある。しかしこの科目は個人的思想が入りやすく、ほとんど答なんか出ない。

### ④ 生活現実との距離

○倫社は大変おもしろかったが終りごろどうしてこんなことを学ぶのか思想専門家がやればいいのじやないかと思いたしたらとたんに興味がなくなった。我々にとってその内容はそれほどくわしくやらなくてもよいのではないか。

○私にとっては経社・政経（とくに経済の方）は、そのいわんとする事が、現実にはあるのだから何か私たちの生活から一歩外へ出ているような気がして、その理解に苦しんだ。」

### ⑤ —残っているもの—

○倫社を習っている時はちっとも面白くなく、こんなことが役に立つのかと思っていましたが、授業も終わって今考えてみますと、人の考えを取り入れて自分の意見というものがはっきりしてきたような気がします。友達とも偉い人の考えについて討論することも多くなりました。

○倫社は高一の時なにもさっぱりわからず高二になり、そこで自分達で発表してやっとわかったような気がした科目でした。でも、あそこで習った思想で私の今の毎日の暮らしの中で役立っているものが少なくありません。（背伸びをして言っているかも知れませんが）。高校の授業に倫社と言うものは必ずあるべきだということをこのごろ痛感します。政経はまだその中にある状態なので、はっきりした感想はありませんが、やはり私においては高三でやるべき科目で、世の中にすぐ出てしまう人に対しても大学へ進む人に対しても大いに考えねばならない問題（社会での）を解くカギを提供してくれたと思います。—

## II-3 倫社・政経教育の問題点

以上が本年度の実践報告である。そこで感じたこと、また本年度参加した全国的な又地域的ないくつかの研究集会で、あるいは最近発刊された倫社批判の書籍や雑誌でみうける倫社政経の記事で、問題点と想ったことなどを整理して私見を記しておきたい。

### II-3-1 教科としての倫社・政経

#### ① うれうべき傾向—いくつかの偏り—

現場の意見や実態をみると、とくに倫社への（「道

徳教育反対」以来の) 抵抗があったり、逆に徳育過剰や政治過剰があったりで、そこにはトマドイやナゲヤリやオシツケの傾向が交錯している。大別するとそこにみうける偏りには ㉗政治主義的 ㉘倫理主義的 ㉙教養主義的 ㉚経験主義的の四つのタイプに分けることができるように思われる。

㉗ 政治主義的の偏向一

ある学校では倫社・政経を一つにまとめて年4時間でやっているが、現実には政経だけで大半をしめて倫社はごく簡単にサツとふれるだけである。また倫社に対する批判が「唯物論の立場でないからダメである」というきめつけに終ったりしている。

㉘ 倫理主義的の偏向一

ある教師は、倫社の中の心理的部分と社会的部分を切り捨てて倫理的部分だけにせよと主張する。seinからは sollen はうまれないという論拠である。またある教師は、人間的感化を与える徳育や教科をこえた学校全体でのそれだけでなく家庭や地域社会にまでの働きかけをふくめて倫社教育の仕事である、と主張しその報告が集った者のうちの多くの感動をよぶこともあった。またある教師は、西洋の倫理思想の根本はキリスト教だから、それをしっかり把握させるためにキリスト教に全力を集中しているという例もある。

㉙ 教養主義的の偏向

これはさらに ウー1 学問主義的 ウー2 受験主義的の二つの教養主義となろう。しかしともに知識の集積を大事にする点では同じである。

㉚ 経験主義的の偏向

日常生活との結合を主張するが、現実から距離をおいてみつめる客観的知性を失いやすい。話し合いや生徒中心はこういう傾向になりがちである。

——さて、以上のうち ㉗は唯物論的 ㉘は観念論的だがともに「おしつけ」「お説教」になりやすく ㉙は「暗記物」になりやすく ㉚は「ただ楽しいだけ」になりやすいが、しかし、実は以上の四つはともに必要な要素の一部であって、ただ局部が肥大してそれのみの万能を主張するところに間違いがおこるのだと思う。そういう点で広岡教授の近著「中等教育原理」の次の指摘に耳を傾け再考する必要がある。(以下筆者の要約である。)

受験主義—「現行教育内容をそのまま肯定し、その中でいかにして多くの得点をえさせるかの教育である。」—それは羅列的知識の記憶、技巧的問題解法の習熟を結果するだけである。(——ふつうの学校のテストでさえ——)

生活主義—それだけでは①学校を包みこんでいる現実社会を肯定して、適応的で社会改造の姿勢が弱い。

②科学・技術・芸術がもつ文化体系の構造を軽んじ、

経験的な日常性の中へ平俗化し、解消してしまう。

社会改造主義—政治主義になる危険。巨視的方向と姿勢はよいが微視的・足元の具体目標がおぼろになりやすい。

文化価値主義—「日常的・たのしみの的に随せず、学習と研究の厳しさに直面させ、精神の安定、を保たせようとしなさい——」「知的探究の鍛錬の中で、眠り倭少化している青年の可能性をゆり動かし伸長させ開化させてゆくべきである。」「学校教育のぎりぎりの存在理由(文化の伝達)を強調する点で教育のカナメにふれている」

②知的教科—筆者の見解は、昨年までの実践の結果の仮説として本報告の初めにのべておいたが、前記広岡教授の分類を借りれば「社会改造」の巨視的方向へ「生活活動」から出発し「文化価値」を身につけて、歩いて行くことを考えるということになろうか。その点、東大哲学科主任教授の岩崎武雄氏がその「倫理・社会をどう教えるか」の文の中で、倫社は「人格を実際に養う徳育ではない」といいきって、次のようにのべてみえるのは注意すべきだろう。<要約—「自主的な判断をもった人間にする」—それはできないかも知れない。しかし少くとも将来、自主的に考えていく基礎を養う。自分で考えるという訓練—そのためには思想への興味をもたせなければならない。話や冗談うまく使えば有効だが本質的問題ではない。やさしい言葉を使うことも必要だが、それもまた本道ではない。内容そのものに、その細部にでなく、全体を通じた大きな筋道を理解させること。お説教、おしつけでなく何故そうなるのか「わけを分らせる」こと。論理的に筋道をもった思考法を身につけさせる訓練を。習ったことをすべて忘れても残るもの——愛知の心を——。「哲学を教えることはできない。教えることができるのは哲学するということだけである。」(カント)>

また雑誌「教育」41年1月号で城戸幡太郎氏が「判断力の訓練が必要である。哲学はその訓練でなければならないが、一般に哲学というよりもむしろ論理学にその役割をもたせた方がよかろう。しかしそのためには新しい論理学が構想されなければならない。一般意味論のごときはそのための構想の一つであろうが、それと関連して言語学と数学が問題となる。」とのべておられるが、これも参考意見として重要であると思う。

文部省の昭和39年「わが国の教育水準」によると、学力調査の結果の欠陥として「数学—(計算能力や方程式解法などの基本的成績は向上しているが)思考力について不十分な点がある—。理科(具体的事実・機械的記憶による知識の成績はかなりよいが)抽象度の高い概念の理解、事象を分析的に考察したり、事象間の関係を関連づけて考察したりする能力・原理・法則

の応用能力等に関する問題は一般に成績が悪い」と指摘されている。

抽象的論理的思考力の養成は各教科によってなされねばならぬと思うけれども、倫社ではとくに力がそがれねばならないと思う。実践報告の部分（Ⅱの2）で政経は倫社よりも更に抽象度が高く生徒の理解が困難になっていることを指摘しておいたが、政経の学習をしっかりと進めるためにも倫社で論理的思考を訓練しておかねばと思う。その意味から倫社を高2で政経を高3でやるというのはよいことであると思う。（現在倫社・政経に加えられている強い批判の一つに、倫社を先にして「一定の態度」を身につけさせてから、政経を学ばせることになるので反対／＼というのがある。一倫社の性格を上述の如く規定するなら、その心配はないと思うのだが）。

### ③ 価値の多元性—

城戸氏は先の文章の別のところで、次のようにのべておられる。「彼等（現代の青年）に共通して認められることはいわゆる戦後派の特性であり、それは民主主義における個人主義と自由主義を現代の問題として批判し自覚することなしに無造作に行動にあらわしていることである。しかしそれと同時に、対立する立場を何の批判もなく一方の立場を鵜呑みにして相手を敵視して互いに争っているものもある。これでは現代の歴史的・社会的意義は認められないし、立場の多元性と対立性から新しい立場の発見も発展も期待できない。現代の歴史的・社会的意義はそこから新しい立場を発見させ、それによって社会を発達させることである。そして発達こそ教育の理念であって、この理念からは立場の多元性と対立性こそ社会を発達させる歴史的契機として操作しなければならないのである。これが教育の方法であり技術であり、それが発達を可能ならしめるためには発達の必然性が認識されなければならない。それが教育の科学であって、それが発達を問題とする科学であるかぎり、一定の政治的イデオロギーや宗教的ドグマや民族的偏見に捉われることなく、立場の多元性や対立性を歴史的・社会的現実として理解しなければならないのである。…(中略)…国民教育者としての自覚はこの問題の発見にある。そして問題の発見は解決の必要を迫られるが、その解決の方法が一定の立場から要求されるならば、その方法は学問的方法というよりはむしろ政策的方法である。」

この言葉はそのまま私自身が模索してきた倫社・政経の基本的方向を示すものとして、受け入れたいと思う。

## Ⅱ—3—2 教科構造の再編制と方法の革新

以上のべてきた倫社・政経の基本的性格からして、

教科構造の徹底的な精選整理が望ましい。この問題については、本稿の初めの昨年までの結論の部分でふれておいたし、又私が執筆した「教育課程改革の動向」（本紀要掲載）の初めの部分でもふれておいたので、参照していただきたい。ここではソビエトで問題とされていることの中から学びとれるものと、大阪大の扇谷教授の見解とにふれておきたいと思う。

扇谷氏は「高校学校教育研究」（1965.6）に寄せて次のような指摘をしておられる。〈要約—非主知主義的学生群の増加が問題となっているが、これは受験体制の被害者だけではない。高校カリキュラムの性格と役割の再検討が必要である。「あまりに多くのことを教えるな。教えるべきことは徹底的に教えよ」〉

全く同感である。倫社で、古典を読みともに考える余裕がもてるようになったらと思う。

ソビエトでは、教育内容の現代化、系統的合理化、精選整理、縮小化が行われつつあり、そこでとくに、次のようなことが問題になっているらしい。（教育技術1965.1.特集・世界の教育改革の動向）

〈記述的事実的材料が多すぎる。このような材料のみの支配を克服して、個別的概念と一般的概念、事実と一般化との間に正しい相互関係をうちたてること。そのために、

① 必要にして十分な、最少限の個別概念を明らかにすること。

② さまざまの年令の生徒に理解しうる一般的概念の体系を明らかにすること。

③ 個別的概念の数を限定し、何もかも教えるのではなく、少数の重要な典型的事実について、明確な形象的記述を行ない、その本質を解明し、他の諸事実との相互関係を明らかにすることが大切である。〉

そのような作業を、倫社・政経についても進めなければならないと思うが、大変な仕事である。教師と学者が協力して始めてできることである。アメリカのPSSCなどのような教科書を日本でも作りたいものである。そのためにも、教育の自由と、教師の雑務からの解放が望まれるのである。また、方法の革新についても、「教育課程改革の動向」でふれた要因の他に、教師の労働過重からの解放という視点からも考えねばならないと思う。どんなに興味があり、重要な部分でも5つも6つも学級をもって同じことをくりかえしていたらいいかげん疲れて、情熱もすりへってしまう。教師の同一内容教科のくりかえす回数限界（それはまたテストの採点の時の労力にも関係してくる）なども真剣にとりあげられてよい問題である。学級定員の問題もそうである。教育の真の効果を期待するなら—。

II-3-3 「政治」と「受験」

ある研究会で「政治と受験の圧力さえなかったら、ほんとの社会科ができるのだけれどもな」ということばがでた。みな同感のようであった。しかし、私は、ふと反撥を感じる心がおこった。一たしかにそうである。全く十分すぎるほどそうである。——がしかしそれだとしたら、「政治と受験の圧力」のない世界がありうるのか？—少くとも、現実の日本にそういう日がすぐ来るのだろうか？それとまともにとりくむことよってのりこえていく道を探しだせないのか？

その反撥的感想は最近のことで、まだ十分に結論を出せないのであるが、昨年の第四報告で、III-10-「勉強—将来」と「性」と題して書いておいた部分を私は思いだしてしまう。その部分と前の問題をつなぐことはできないのか？これは残された課題であるが、第四報告未見の方のため関係しそうな部分を引用しておく。

「しかしこれを慨嘆する前に、この関心のエネルギーをより高いものに結合し転化させてゆくことこそを考えるべきではなからうか。〔勉強—将来—自分〕という軸は、社会的思考にまでつながってゆきうるものであり、〔自分—友人—異性〕の軸は、自—他という人間認識と人間尊重にまで高められる可能性を秘めていると考えられないだろうか。また、『成績がよくなりた』『どのように勉強したらよいか』という欲望を、ただ叱咤激励するだけでなく、もっと客観的にとらえて、勉強→思考・記憶・努力・きびしさ、という風に位置づけてゆく時、かえって主体的なものにそれを転化してゆけるのではないだろうか。『現実から出発する』という時、社会的リアリズムそのままにとらえる考え方を我々はしてきたが、もっと素材にごくふつうの事実までたちかえって、それを社会的なものにまでつなげてゆく努力をしてゆくことが必要なのではなからうか。」

III むすび—残された課題

① 五年間の実践をふりかえって

昭和36年度から現在まで、問題としてきたことを整理してみると、㉔生徒の現実に立脚し、相互の交流の中で、㉕知的系統に支えられた抽象的論理的思考をどのようにしてゆくか、という(A)方法上の問題とどのような内容・構造・焦点掘り下げ・具体化が必要かという(B)内容上の問題の二つにまとめられると思う。

36年度 第1報告

- ㉔ 生徒の関心・興味・意識から出発
- 話し合い—パズ

◎、○はテーマ、  
× は残された問題点  
(A) は方法上の、  
(B) は内容上の問題点。

討議、資料集の自作、評価せず

- ㉕ 講義学習とグループ学習の比較検討
- × 話し合いの限界(A) 抽象名辞・固有名辞・思想の系譜のとり扱い(B)

37年度 第2報告

- ㉔ 講義学習の中での内容のとり扱い
- ヘレニズム思想(とくにエピクロス) 東洋思想・宗教・マルクシズムに重点
- ㉕ 一斉学習の中での集団思考
- × もっと掘り下げを—(B), 話し合いはやはり必要である—(A), 評価は必要である—(A)

38年度 第3報告

- ㉔ 1年から週1時間2年間継続実施
- ㉕ 系統学習とテーマ学習の比較研究
- × 相互交流の重要性(A), 抽象的論理的思考の発達段階と学習内容(B), 焦点づけと具体化(B—A)

39年度 第4報告

- ㉔ 講義・講義・自発発表・話し合い学習の比較研究
- ㉕ 心→倫から心→社への変更
- × 話し合い学習の中での知的系統(B—A), 講義学習の中での相互交流(A—B)
- 教科書の内容構造・配列の分析(B)
- 生徒の抽象的思考の発達段階と教授方法(A)

40年度 第5報告

- ㉔ 教材構造配列のくみかえによる学習効果の比較検討(B—A)
- 倫社思想史と世界史(B)
- ㉕ 政経学習上の困難点(A—B)
- 倫社・政経学習を終了しての生徒の感想(A・B)
- × 内容の精選・構造化(B) 抽象的思考力を如何にして身につけさせていくか、「受験」に対してどのように対応するか。(B・A)

以上を追求してきたわけであるが、教科としての倫社・政経の性格の規定、方法論の問題については私なりに一応の結論を出し得たものと思う。問題は、内容と、論理的抽象的思考の形成の二つにしばらくしてきたような気がする。それと(私個人の問題意識もあるが)近代日本の倫理思想と政経のとらえ方、これは1968年の維新百年と'70年をひかえて、特に明確にしておきたいものだと思う。

② 来年以後の研究計画

上にのべた課題をふまえて、来年以後順次

a. 倫社

ア 倫理想史の主題的構成と系統史的構成と古典



読書中心の構成の三つの内容編成と、それによる学習効果の比較検討（41年度，高2三クラス対象）

イ．教科内容全般の構造配列のくみかえによる比較研究（42年度）

b．政経

ア 教科内容の比較検討（異なった教科書を用いて）

イ 現代的内容の導入，時事問題—白書・新聞などを利用しての学習指導

c．以上の中での論理的思考の訓練—そのための方法の探究と，生徒の思考過程の研究

以上のような研究計画を現在たてている。

③ 終りに—

今までの研究は，まことに暗やみの中を手さぐりで

進むようなものであった。そのため，幾つかの間違ひも犯したり，また現在の一応の到達点も完全なものではなかろうということを筆者自身感じている。とりわけ，倫社・政経を一つの知的教科と規定して，そこからはみ出るもの—社会的実践的態度か，人格的感化的要素とか，更には，人間行動の原動力ともいべき心情につながる国民感情（ナショナリズム），一方では人間として無視できぬ実存的宗教的要求など，総じて情操とか実践とかにつらなる重要な問題をそこでどう位置づけるか，という問題はいつも心の底にある。これらの課題をも絶えず視野の中において研究をすすめていかねばならぬとは自戒している。

全国の現場で同じ問題にとりくんでおられる方々の御批判・御教示を願って第五報告を終りたい。

（1966. 1. 3）